ロータリー：ロータリーは機会の扉を開く

MORIOKA-NORTH RC weekly 2020-21

RI 会長＝ホルガー・クナーク
RI第2520地区ガバナー・伊藤智仁
盛岡北 RC 会長・鈴木裕子
盛岡北 RC 幹事・山地信行
会 報 委 員 長・藤井　匠

■事務所・020-0878 盛岡市肴町 4-20 永卯ビル 2F TEL(019)623-6626 FAX(019)623-3664 ■例会日・水曜日 12 時 30 分ニューウィング 11F

第30回例会　2021年４月21日㈬ 晴　No. 2975　●ソング＝それでこそロータリー　進行：藤澤大祐副SAA

■卓話■　小川洋右会員

３月の例会で、卓話の機会を頂戴致しましたが、残念ながら休会でしたので、資料と原稿データを寄稿させていただきました。昨年末に販売されました「年末ジャンボ宝くじ」において、ここ盛岡市内の販売店でお買い求めされた方が、見事、前後賞合わせて10億円を手にされたこともあり、私共、みずほ銀行が永年に亘り、業務受託している「宝くじ」をテーマとした内容とさせていただきました。お時間のある時に、是非ご覧いただければと思います。また、本日は、目立ちたがり屋の私を慮っていただき、山地幹事より、改めて本日、卓話の機会をご指示いただきました。大変光栄に存じつつ、お時間を頂戴致します。どうぞよろしくお願い致します。

さて、先日は松山英樹プロのマスターズ優勝、本当に素晴らしかったです。そして水泳の池江選手の白血病からの復活。それから、エンジェルスの大谷翔平選手の本格的な二刀流。コロナ禍でありながら、スポーツ選手の活躍には本当に希望や勇気をもらえるものだなあと、つくづく感じております。そして、一年遅れでの東京オリンピック2020大会です。

個人的には、アスリートが活躍する場面は、やっぱり見たいなあというのが本音であり、様々な制約の中、規模を縮小した大会は寂しいとは思いますが、私はやっぱり、アスリートが懸命に頑張る姿が見たいなあと思っています。今日は、過去のオリンピックを皆さんと一緒に振り替える。そんなお時間にさせていただきたいと思います。

私は1972年、昭和47年に生まれました。この年は、日の丸飛行隊が活躍した札幌オリンピックが開催されました。笠谷、金野、青地３選手が表彰台を独占したそうですが、私は母のお腹の中におりましたので、記憶にありません。オリンピックの中で、私が鮮明に記憶に残っているのは、1984年に開催されたロサンゼルスオリンピックです。その前の大会であるモスクワオリンピックへの不参加もあり、小学校６年生の私にとっては、とてもキラキラした映像に映りました。開会式では、ジェットエンジンを背中に背負ったロケットマンが空を飛んでいましたし、カールルイスの大活躍や、柔道無差別級での山下対（エジプト）ラシュワンの決勝戦。体操の具志堅、森末。特に種目別森末の鉄棒は鮮明に記憶に残っています。片手大車輪からのトカチェフ、トカチェフ、マルケロフ、フィニッシュは伸身のスワンダブル。着地が決まり10点満点でした。女子マラソンのスイスのアンデルセンもゴールにたどり着きました。本当に記憶に残っています。その後もオリンピックでは沢山の名場面がありました。

例えば、バルセロナの200m平泳ぎ、14歳岩崎恭子の金メダル。「今まで生きてきた中で一番幸せです」。『14歳のセリフかよ』と突っ込みたくなりましたが、初々しかったです。もう30年も前の話です。先日亡くなった柔道古賀の足を負傷した中での金メダル。シドニーの高橋Ｑちゃんの金メダルや、長野オリンピックのジャンプ団体、原田雅彦の「船木～」も泣かされました。アテネの体操団体、最後の富田選手の鉄棒での名実況も忘れられません。「伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ！」もう、本当にいっぱいよみがえってきます。

このように沢山の名場面がある中で、私が最も印象に残っている場面。それは、1988年ソウルオリンピックでの水泳100m背泳ぎ決勝での鈴木大地選手。前スポーツ庁長官の金メダルです。実はソウルオリンピックは、私の出身地名古屋市が開催地を争い、負けてしまったという経緯もあり、日本人が是非頑張ってほしいなあと強く思っていたというのもありますが、実はこのレースには、

■会長報告■

本日も出席ありがとうございます。コロナ禍もまだまだ猛威をふるっておりますが、今日も例会が開けましたこと嬉しく思っております。

いろいろな催しが中止となった昨年でしたが、今年はかたちを変えて開催されているものもあるようです。その中に先日18日に開催された「盛岡市内一周継走大会」があります。月曜日の岩手日報の紙面には、大きく取り上げられていました。我が家では、中学校女子の部に孫が参加しましたので朝早くからバタバタと慌ただしくしておりました。応援合戦などは出来ませんでしたが、各中学校の横断幕が華やかでした。

思えば23年前息子も参加していたのですが、あまり鮮明な記憶がなく息子夫婦の子供に対する熱の入れようと比べれば随分と冷めた親だったと感じました。一生懸命走る子供たちの姿を目にして元気をもらい、久しぶりに活気のある日曜日となりました。

かたちを変えてもやはり開催することが、活気に繋がると思われます。

ロータリーでは、昨年地区協議会は中止となり資料とガバナーエレクトのビデオ配信と一方通行でしたが、今年はリモートで行われるということです。私も一応参加予定にはしていました。リモート会議とかやった事がなくネット環境が不安なところではありますが、頑張ってみます。参加予定の会員の皆様宜しくお願いいたします。

■幹事報告■

１．盛岡中央RC　5月例会の案内
　5/4　祝日休会
　　11　通常例会　会食あり
　　18　夜例会　弁当持ち帰り　会食有の併用
　　25　夜例会　弁当持ち帰り　会食有の併用
２．盛岡西RC　5月例会の案内
　5/6　12時半よりアートホテルにて
　　創立記念例会
　5/13. 20. 27　通常昼例会
３．ハイライトよねやま
　テーブルで回覧ください。
４．来週、4月28日はゴールデンウィーク特別休会です。
　お間違えの無いようお願いします。

SMILE

☆**山地信行**会員…桜がきれいです。来年こそは皆でお花見したいです。

☆**工藤　泰**会員…今日も皆様にお会いできて大変うれしいので、スマイルします。

☆**岩井澤昭一**会員…青空の岩手山を見てスマイル

☆**吉田祐一**会員…事業所創立記念日ですので

☆**小川洋右**会員…爽やかな陽気となりました。この天気のようにコロナ禍が終息することを願いスマイル致します。

☆**藤澤大祐**会員…明日誕生日の鈴木会長おめでとうございます。今日は桜も天気も凄くきれいです。小川会員の卓話、すごく楽しみです。

☆**細野裕之**会員…小川さんの卓話が楽しみで聞く前からスマイルです。

出席報告

会員数	38名
出席数	13名
出席率	39.3%
前々回修正出席率	45.45%

■本日のメニュー■

五目あんかけ焼きそば
飲茶二種盛合せ
ワンタンスープ
ザーサイ・焼帆立
杏仁豆腐

物凄いドラマがあって、私が仕事をする上で、ヒントにさせていただいている物語がたくさんつまっている挑戦でした。

この内容は、後にNHKスペシャルで報道されましたし、スポーツ評論家の二宮清純さんも取り上げて語られている有名な話ですので、ご存じの方も多いかもしれませんが、どうかお付き合いをいただければと思います。まずは、皆さんにそのレースを振り返っていただこうと思います。映像はお届けできませんが、当時の実況をお聞きいただこうと思います。実況は、元NHKスポーツアナウンサーの島村俊治アナウンサーです。ぜひ目を閉じて、当時の映像を思い描きながら聞いていただければと思います。如何でしょうか？当時の映像が浮かんできましたでしょうか？

実は、鈴木大地選手は、18歳でロス五輪にも出場していたそうですが、世界の壁は途轍もなく厚くて、100m、200m背泳ぎは共に予選落ちでした。400mメドレーリレーのみ決勝に残り、そこで背泳ぎ選手として第一泳者であった鈴木大地は『57秒70』の日本記録をマークするのですが、メダルには手が届きませんでした。日本記録を出しはしましたが、鈴木大地選手は、達成感は、欠片ほどさえ、手にすることができなかったと当時を語っています。これも一つの大きなきっかけとなり、４年後のソウルに向け鈴木大地選手の雪辱戦、リベンジが始まることになります。

この時点で、鈴木大地がソウル五輪で金メダルをとることなんて、誰も予想していなかった。ただし、鈴木大地本人を含めた３人だけは違っていました。この残りの二人とは、所属先でフィットネススポーツクラブを運営するセントラルスポーツ当時社長の後藤社長と鈴木大地専属コーチの鈴木陽二コーチ、この二人でした。この後藤社長は、1964年東京オリンピックの水泳代表選手だったそうです。100m自由形の日本記録保持者としてメダルを期待され臨んだ東京オリンピックでしたが、400mリレーこそ４位に入ったものの、メダルには手が届かなかったそうです。その悔しさを「後輩に託したい」、「後進を育てたい」。その一念で、体操の金メダリストで「鬼に金棒、小野に鉄棒」と言われた小野喬（おのたかし）さんと同じく体操の小野清子（おのきよこ）さん夫婦、そして同じく体操の遠藤幸雄さんらと起業したのが、セントラルスポーツでした。世界一を志す水泳少年、水泳選手が一般の利用者に遠慮せず、競泳の練習に専念できる環境は、1964年当時、ほとんどありませんでした。後藤社長は、会社組織で競技環境を整え、選手育成に歩みだした先駆けの一人だった訳です。

一方、鈴木陽二コーチは、選手としての実績はほとんどなし。スイミングクラブのインストラクターからキャリアをスタートし、後藤社長に指導者としての才能を見出された人物です。そして、鈴木大地という才能と出会い、鈴木陽二は、コーチとしての才覚を発揮していきます。リベンジに向け、懸命に励むチーム鈴木大地。この中で特に、技術を磨き上げたのが、バサロスタートです。バサロとは、水中を仰向けで潜水し、ドルフィンキックで進む泳法です。無駄な上下動や、左右のブレを防ぎ、水の抵抗を抑えながらキックの推進力で前に進む。しかしながら、潜水している訳ですから、呼吸ができず体力の消耗も激しい。そこで編み出された、鈴木大地にとって、最速の作戦がありました。それが、「タイムにして12秒、バサロキック21回、25mで浮上する」。これが鈴木大地にとっての理想のバサロ。実戦と練習で導き出した作戦でした。

時は流れ、迎えた1988年ソウルオリンピック。ライバルは、ロケットスタートが特徴の世界記録保持者アメリカのバーコフと、強力な後半の追い上げ に 力を発揮する粘り強いロシアのポリャンスキー。レース当日の９月25日、午前中の予選で、鈴木大地はライバルのバーコフに予想以上の大差をつけられてしまいます。バーコフは絶好調。バーコフは、世界記録を更新し、「54秒51」という当時驚異的な記録で予選を通過します。一方、鈴木大地は予選第３位の「55秒90」。その差１秒39。約1.4秒ということは距離にして2.5m。このままでは勝負になりません。夜の決勝までの間、鈴木大地と鈴木陽二コーチは選手村で、予選のビデオを何回も何回も振り返りながら、決勝への秘策を練りました。「大地、俺たちが目指しているのは、ただのメダルじゃないよな。金だよな。」「もちろんですよ。」大地は手短に返答します。「大地、21回のバサロ、25回にしないか？そうすれば、スピードに乗ってバーコフにくらいついていける。距離にして５mは伸びる。バーコフとの差は縮まるはず。それからバーコフやポリャンスキーも、いつもと違うと動揺して混乱するはずだ。大きな賭けだが、どうだ？」「いや、勝負するしかないでしょう。25回じゃない。27回でいきますよ。」

これまでの対戦で、バーコフは爆発力こそあるものの、好不調の波が激しいチキンハート。プレッシャーに弱いことは知っていました。絶好調のバーコフだが、水面に浮上した時、ぴったりと横にくっついていれば、泳ぎが乱れるのではないか。ラスト25mまでついて行けば、きっとゴール寸前で逆転できる。鈴木大地と鈴木洋二コーチは、そう読んだわけです。

迎えた夜の決勝。プール中央４コースは予選１位のアメリカバーコフ。正面手前５コースが予選２位のロシアポリャンスキー。予選３位の大地は向こう側３コース。金メダルを争う３人が並んで競い合います。いよいよ作戦を決行する決勝戦のスタートです。

スタート。戦いの火蓋が切って落とされました。各選手バサロスタート。25m手前でまずは、５コースのポリャンスキーが水面に浮上しました。左隣４コースのバーコフがまだ潜っているのはいつも通り。但し、その向こう３コースの大地が水面に上がってこない。ポリャンスキーは「大地も自分と同じ25mで浮上するはずなのに、姿が見えない。ひょっとしたら、自分の浮き上がりが早すぎたのか？それとも、視界にいないということは、大地はずっと先を行っているのかもしれない」。背泳ぎなので、前方を見ることができない訳です。ポリャンスキーの心に動揺が走ります。前半は体力を温存し、後半勝負が真骨頂のポリャンスキーですが、前半から力が入り過ぎ、後半へのスタミナが徐々に切れていきます。一方のバーコフ。先に浮上するはずの左側の大地が、25mを過ぎても浮上しない。「ん？なんだ？」と動揺します。30m付近で大地が浮上。バーコフもほぼ同時に浮上。「なぜ、同時に浮上するんだ。タイミングがいつもと違う。」バーコフにも大きな混乱が生じます。しかも、バーコフの事前予想では、浮上した時点で体一つ分のリードができているはずなのに、「体半分のリードしかない」。心が乱れ、泳ぎにも繊細な変化が生じます。

鈴木陽二コーチはこの時、「いいぞ、作戦通りだ。次は左手ターンで折り返せるか」。当時は、現在と違い、背泳ぎでのクイックターンが認められておらず、手をつく必要がありましたが、大地の得意は左手ターン。さあ、50mのターン。大地は見事左手ターンで折り返し。バーコフリード、大地第２位。その差、体半分。対決はバーコフ、大地、この２人に絞られました。残り25m。「なぜだ、なぜだ」心が乱れるバーコフ。ついて行く大地、むしろ、残り20m付近から大地が猛追してきます。残り10m、並んだ。あとは、タッチです。タッチ、タッチはどうか？

勝った。鈴木大地、55秒05、55秒05、金メダルとなったのであります。この、時間にして１分弱の間に、物凄い心理戦が繰り広げられていた訳です。本当に凄いと思います。また実は、大地には、もう一つ作戦があったのです。

鈴木大地は、ギリギリの勝負において、最後のタッチで負けるのだけは、絶対に避けたい。腕を回してタッチするのではタッチが遅れる。だったら、腕を真っすぐ伸ばして、指が折れてでも良い、という覚悟で、ゴール板を突くことを決めていたそうです。それが想定通りに行えたと、レース後、鈴木大地は語っています。この勇気と執念、これまた凄いと驚かされます。

実は更にもう一つ鈴木大地には秘策というか事前準備があったそうです。何だかご存じでしょうか？それは指の爪を５㎝程伸ばしていたのです。ここまで徹底する準備力、凄いと言わざるをえません。

この一連のドラマ。事前に鍛錬を重ね、自分のチカラ、技術を磨く。そして経験や、事前の対戦を通じて、情報を入手し、仮説を加えながら作戦を立て、対決内容をイメージする。そして直前までできること、準備しておくことを、これでもかと徹底する。正に、仕事をする上での理想とする行動様式だと思います。

以上、当時を懐かしく振り返りましたが、やっぱり、オリンピックは良いと思います。今後もアスリートの活躍を楽しみにしながら、勇気と感動を味わいたいなと、そして、結果とともに、それまでの努力や苦悩、人間ドラマをもっともっと知りたいなと考えております。

コロナ禍の一日でも早い終息を願いつつ、結びとさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。